

13) オモト=万年青

オモトはユリ科の常緑多年草で、本州中部以南の山地に生え、鑑賞用として古くから栽培されている。葉は長さが 30~50cm、広い披針形の革質で光沢がある。初夏、長さ 10~20cm の太い花茎を出して、淡黄色の小花を密集した穂状花序をつくる。果実は球果で秋には赤熟する。和名の由来にはいくつかの説があり、その一つは大本(オオモト)の意味で、大きな株を表現したものとする説。母人(オモト)の意味で、葉が果実を抱くように付ける姿を、母が子供を抱いている姿に見立てたとする説。大分県宇佐八幡近くの御許山(オモトヤマ)に産するためとする説。常緑であるために青本(アオモト)が詰ったとする説などである。別称としてはオモドがある。学名は『*Rohdea japonica*』で、属名はドイツの植物学者 J.G.ローデの名に因む。イギリスでの呼称は『Japanese rohdea』、中国では『万年青』『老母草』である。

オモトは日本独自の観葉植物として葉も果実も美しく、しかも常緑であったために古くから栽培されていた。これがブームとなったのは江戸時代になってからのことである。一説によれば徳川家康が三河から江戸城に移るとき、三河国の長島長兵衛という者が『燕尾』『東鑑』『煙葉』という 3 種類の万年青を家康に献上したところ、家康はこの万年青がいたく気に入って、愛培したことから始まったといわれている。しかし一般化してくるのは元禄時代(1688~1704 年)になってからで、同時代に伊藤三之丞が記した『花壇地錦抄』や、水野元勝が記した『花壇綱目』にはその名前が見えている。また生け花の花材としても広く用いられていたようで『立華正道集』(リッカショウドウシュウ)や『抛入花伝書』(ナゲイレバナデンショ)にも記されている。しかし幕末になるとブームが過熱して、余りにも高価になったため嘉永 5 年(1852 年)には販売禁止令が出されるほどで、まさにオランダの『チューリップ時代』を思わせるものであった。その後も万年青のブームは周期的に起こり、明治時代から昭和の初めにかけて、何度か大人気になった。万年青の斑入り葉種は、他の植物と比べると変化が極めて多く、単に斑が入るだけでなく変り葉品種は数多にのぼる。このため収集アイテムになりやすかったのだろう。現在でも万年青の収集家は植物愛好家の中でもずば抜けて多く、数多くの専門書も出されている。

オモトの根茎には配糖体ロデインを含み、強心剤として用いられる。この作用は極めて強く、服用には十分な知識が必要なほどである。またオモトの煎汁で洗髪するとフケを防止する働きもある。

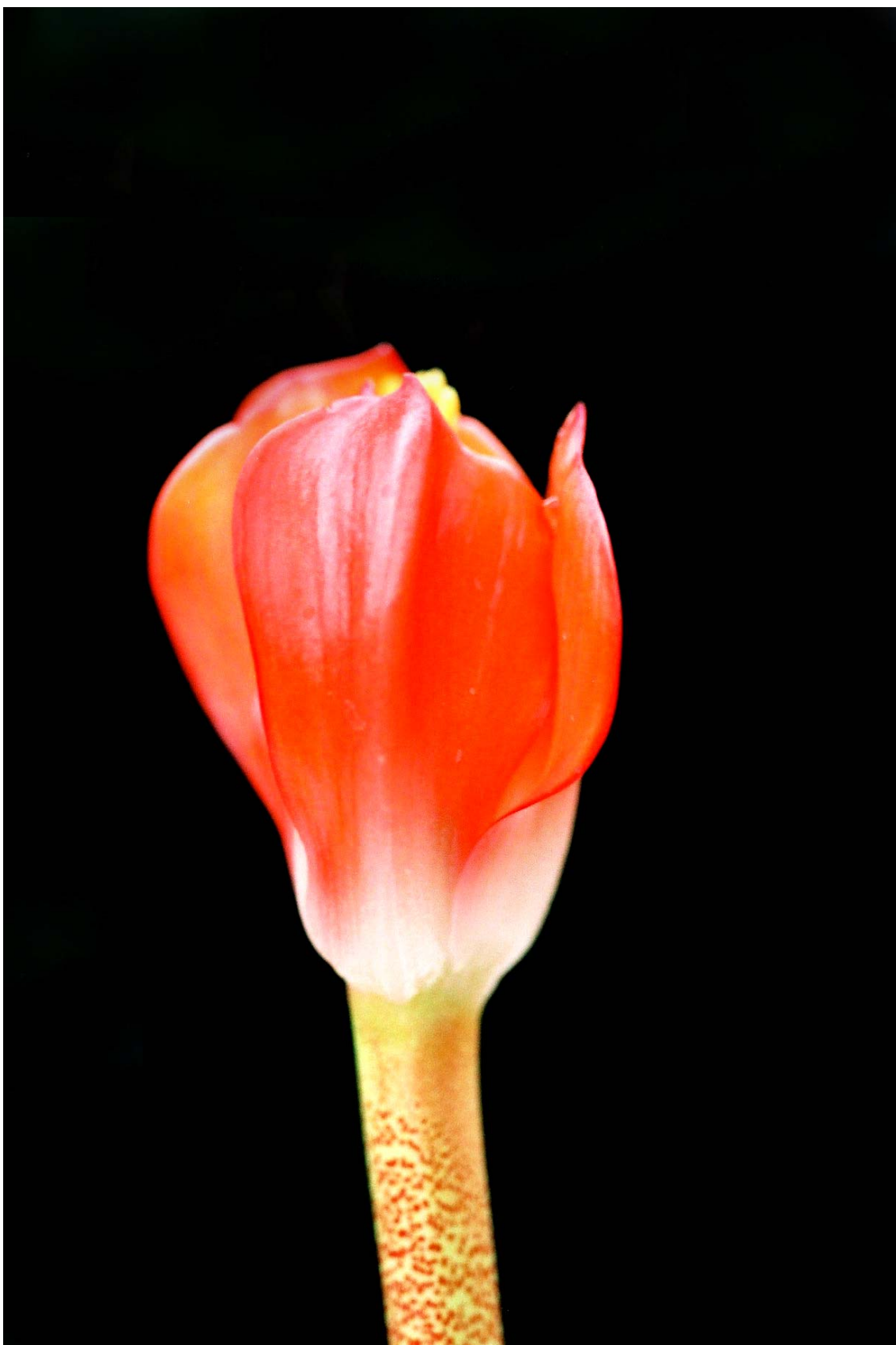
オモトによく似た花と葉を持つ品種に、マユハケオモトといわれる植物がある。花の姿が眉をかく刷毛に似ているところから名付けられたもので、南アフリカ原産のヒガンバナ科の植物である。最近、花屋さんでよく見かけるが、白い花を咲かせるものと、赤い花を咲かせるものがある。ともに冬は 5°C以上の温度が必要で、室内で管理しなければならないところが残念である。



オモト：太陽の果実(埼玉県深谷市)。



ツバメオモトはユリ科ツバメオモト属の多年草で、学名は『*Clintonia udensis*』である。関西以北の針葉樹林下などに生え、果実は7~8月ごろ、照りのある瑠璃色に熟す(長野県軽井沢町)。



マユハケオモトの花、学名は『*Haemanthus albiflos*』で、10℃以上なら越冬できる。

[目次に戻る](#)